

ヨハネの手紙第二

1-6 節

アウトライン

1. 序文 (1-3 節)
2. 初めから持っていた命令 (4-6 節)

結論：ヨハネの手紙第二を学ぶことの重要性

1. 序文 (1-3 節)

1 節 a：長老から、選ばれた夫人とその子どもたちへ。

1. 著者：長老＝使徒ヨハネ

- (1) 手紙の文体、中に出てくる教えなどが、ヨハネの福音書やヨハネの手紙第一とよく似ている。
- (2) ユダヤ人たちは、部族ごと、町ごとなどで指導的な立場にある人々を「長老」と呼んだ。
- (3) 教会も「長老」という指導的役職を自然に取り入れた（使 11:30；14:23；Ⅰテモ 5:17-19 など）。教会の中で、「教会を治める能力がある」人が長老に選ばれた。
- (4) 使徒はイエスの公生涯の目撃者である。また、イエスご自身から直接弟子訓練を受けた者である。そして、教会の最初期からの指導者である。
- (5) 使徒ヨハネが自分のことを「長老」と呼んでもおかしくない。ペテロもまた、自分のことを「長老のひとり」と言っている（Ⅰペテ 5:1）。
- (6) ヨハネの場合には、この手紙を執筆した時点で文字通りの老人であった。

2. 宛先：「選ばれた夫人とその子どもたち」

- (1) 「選ばれた夫人」とは、ある地域教会を指す象徴的な言葉で、「その子どもたち」とはその教会の信徒たちを指すという説がある。
- (2) 実際のクリスチャン夫人とその家庭を宛先とする説もある。
- (3) いずれにしろ、手紙の宛先は、特定のクリスチャンの「共同体」である。

3. 執筆の目的：異端の巡回伝道者について警告するため

- (1) 第一の手紙の執筆目的は、教会内で発生した異端者たちによる分裂に悩まされていた読者たちに、彼らの救いの確証と励ましを与えるためであった。また、中心的な教えは「イエスは人となって来られたキリストである」という真理と、「互いに愛し合う」ことの実践であった。
- (2) この手紙でも、まず与えられているのは「互いに愛し合う」ことの勧告である（5 節）。この勧めが与えられた理由は、異端者が現れていたからである（7 節）。
- (3) 9-11 節に具体的な警告が述べられている。その内容は、読者たちの家を訪ねてくる巡回伝道者へのもてなしについてである。
- (4) 当時、各教会の霊的指導者として、巡回伝道者が大きな役割を担っていた。
- (5) 教会史の初期では、巡回伝道者へのもてなしを悪用する偽教師たちが問題となっていた。
- (6) ヨハネは第一の手紙で教えられていた真理に基づき、巡回伝道者の扱いは、その人物がキリストの教えに留まっているかどうかで判断せよ、と教えている。
- (7) この基準に当てはまらない人物（異端の巡回伝道者）について、ヨハネは「家に受け入れてはいけません。その人にあいさつのことばをかけてもいけません」と、厳格な扱いを命じている。

1 節 b：私はあなたがたをほんとうに愛しています。私だけでなく、真理を知っている人々がみな、そうです。

2 節：このことは、私たちのうちに宿る真理によることです。そして真理はいつまでも私たちとともにあります。

3 節：真理と愛のうちに、父なる神と御父の御子イエス・キリストからの恵みとあわれみと平安は、私たちとともにあります。

1. この挨拶では、読者に対するヨハネの親愛の情が示されている。

2. 序文のキーワード：真理

- (1) 1-4 節の中で 5 回も使われている。
- (2) 聖書の中で「真理」とは、「御言葉に啓示された真実に対する神の誠実さ」を表す言葉である。
- (3) ヨハネは、特に「真理」という言葉をイエス・キリストご自身と結びつけて使っている（ヨハ 14:6；Ⅰヨハ 2:21-23）。

(4) キリストは、神のことばが受肉した方であり、ご自分の約束を必ず成就される方である。

3. ヨハネだけではなく、「真理を知っている人々がみな」読者たちを愛している。

(1) イエスはクリスチャンに「**わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい**」という「**新しい戒め**」をお与えになった。

(2) イエス・キリストにあって真理を知った者はみな、同じ主にある兄弟姉妹を愛するように命じられている (Ⅰヨハ 4:20-21；5:1-2)。

(3) 私たちはひとりではない。私たちがイエスの体の一部であるならば、同じ体に属している兄弟姉妹たちが、私たちを愛し、気にかけてくれている。これが、読者に対するヨハネの愛の挨拶である。

4. 私たちには真理が宿っている

(1) クリスチャンの内には聖霊が住んでおられる。

(2) 聖霊によって、御言葉に誠実ではあり得なかった私たちの性質が、御言葉に忠実に歩むことができる状態に置き換えられた。

(3) 私たちに与えられている御霊は、私たちと永遠に共にいてくださる。

(4) 私たちは、神から生まれた者は互いに愛し合うべきだという御言葉の確かさを、聖霊によって知っている。聖霊が与えてくださる力によって、互いに愛し合うことができる。

(5) クリスチャンの愛の実践の基盤は、御言葉の確かさにある。

5. 恵みとあわれみと平安

(1) 普通の挨拶では、「～に挨拶を送ります」(ヤコ 1:1)、「恵みと平安があなたがたの上にありますように」(ほとんどのパウロ書簡) などと書かれる。(パウロの場合、テモテに対しては「恵みとあわれみと平安とがありますように」と言っている。Ⅰテモ 1:2；Ⅱテモ 1:2)

(2) ヨハネは、「恵みとあわれみと平安は、私たちとともにあります」と宣言している。これは、他の書簡の挨拶とは決定的に異なっている。

(3) 「恵みとあわれみと平安」は、父なる神と御子イエス・キリストから与えられる。

(4) 「恵み」は、それを受けるに値しない罪人である私たちに与えられた、神からの一方的な賜物 (gift) である。

(5) 恵みは、愛である神が、愛される価値のない私たちに向けてくださった「あわれ

み」によって与えられた。

- (6) あわれみ豊かな神が、ただ恵みにより、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされた（エペ 2:4-8）。それによって、私たちは神と和解し、「平安」を得た（ロマ 5:10）。
- (7) 私たちが「真理と愛」に留まるとき、「恵みとあわれみと平安」を楽しむことができる。
- (8) 神が私たちに望んでおられる愛の実践は、盲目的に他者を愛するというのではなく、神の御心の通りに愛するというものである。
- (9) 私たちは御言葉の「真理」を軽視して愛を実践すべきではない。「真理」について妥協した愛は、神の御心を見殺した行いであり、実のところ、愛ではない。「真理と愛」の両方に留まり続けるとき、私たちは御父から、御子を通し、「恵みとあわれみと平安」という祝福を体験することができる。

2. 初めから持っていた命令（4-6 節）

4 節：あなたの子どもたちの中に、御父から私たちが受けた命令のとおり真理のうちに歩んでいる人たちがいるのを知って、私は非常に喜んでいます。

- 1. 読者たちの中には、神が使徒たちを通してお与えになった命令を守り、御言葉に忠実に歩んでいる者たちがいた。
- 2. ヨハネはそのことを非常に喜んでいて。
- 3. 使徒たちとの交わりは、神との交わりそのものである（I ヨハ 1:3）。使徒たちに喜ばれるような歩みは、神にも喜ばれているはずである。
- 4. 神に喜ばれる歩みとは、使徒たちが教えた通りに歩むことである。彼らの教えの中で後世の私たちが必要としていることはみな、神の御手によって守られ、新約聖書として残っている。

5 節：そこで夫人よ。お願いしたいことがあります。それは私が新しい命令を書くのではなく、初めから私たちが持っていたものなのですが、私たちが互いに愛し合うということです。

1. ヨハネは「私たちが互いに愛し合うということ」を「お願い」している。これは「命令」ではなく、「要請」や「懇願」である。
2. 「互いに愛し合うということ」は「新しい命令」ではなく、「初めから私たちが持っていたもの」である。相互愛は旧約聖書から命じられていた古い命令であり、クリスチャンにとって最も基本的なメッセージのひとつである（I ヨハ 2:7；3:11）。
3. ヨハネの「お願い」の理由
 - (1) 「子どもたち」の全員が、使徒たちの教えに忠実に歩んでいたわけではなかったかもしれない。だから、読者たちが全体として真理の内を歩み、「互いに愛し合う」ことを懇願している。
 - (2) あるいは、読者たちが使徒たちの教えに忠実に歩み続け、さらに互いに愛し合い続けていくことを要請している。
4. 「私たちが」互いに愛し合うということ
 - (1) ただ読者たちが共同体の中で愛を実践するだけでなく、ヨハネ自身との愛ある交わりが「お願い」されている。
 - (2) この手紙の後半では、異端者の問題が扱われている。そういった問題の中でクリスチャンに必要とされているのは、イエスがそうされたように互いに愛し合うことであり、さらに使徒たちの教えから離れないことである。

6 節：愛とは、御父の命令に従って歩むことであり、命令とは、あなたがたが初めから聞いているとおり、愛のうちを歩むことです。

1. キアズム（chiasm；交差法）
 - (1) 愛→命令→命令→愛という構造になっている。こういった A→B→B'→A' という構造は、ギリシャ語の文学的表現でキアズムという。
 - (2) キアズムによって強調されるのは、中心に置かれている句である。つまりヨハネは、「命令」という要素を強調している。

2. Ⅰヨハ 5:2-3: **私たちが神を愛してその命令を守るなら、そのことによって、私たちが神の子どもたちを愛していることがわかります。神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。**
3. 御父の命令を守り真理の内を歩む読者たちにとって、互いに愛し合うことは当然であり、ふさわしいことである。

結論：ヨハネの手紙第二から学ぶことの重要性

1. 第二・第三ヨハネの軽視について
 - (1) どちらも非常に短く、軽視されていることが多い。
 - (2) ロバート・W・ヤーブローの皮肉
「ほとんどの教会は、彼らの聖書の中に第二ヨハネや第三ヨハネがなかったとしても、その不足に困ることなく、生涯機能していくことができるだろう。」
 - (3) しかし、どちらも聖書に入っているのだから、重要ではないわけがない。
2. 第一の手紙の「適用」として
 - (1) 第二・第三の手紙は、第一の手紙で語られた「愛の神学」の適用編である。
 - (2) 第二の手紙：愛の実践、異端問題、巡回伝道者のもてなし問題について
 - (3) 第三の手紙：教会における権威の問題について
 - (4) 第二・第三の手紙を学び、それをふまえて第一の手紙を読み直すことによって、私たちは第一の手紙の内容をよりはっきりと理解し、どのようにクリスチャン生活に適用すべきか、考えていくことができる。
3. 真理に関する厳格さ
 - (1) 現代は「ポストモダン」の時代である。
「普遍的な真理であるかということよりも、真理というのは人それぞれなので、人それぞれのフィーリング（感覚）に合っているものを選べばいいじゃないかということ、価値として優先させる時代に入った」（大嶋重徳）
 - (2) 第一の手紙から続いて、第二の手紙でも、「イエスは人となって来られたキリストである」という真理について妥協してはならないと教えられている。

- (3) 第二の手紙は、真理を巡ってクリスチャンが示すべき厳格な姿勢を教えている。
- (4) クリスチャンはこの手紙の内容をよく学び、絶対的な真理を否定する「世」の人々に証しをしていかなければならないだろう。

4. 「愛」について

- (1) 現代では、教会に集う人々の間でも「愛」の受け取り方が変わってきている。
- (2) 神は「愛」であるが（Iヨハ 4:8、16）、同時に「光」でもある（Iヨハ 1:5）。
- (3) 神ご自身において、義と愛、あるいは真理と愛は、常に調和している。
- (4) 私たちも、愛の実践を考えると、常に義や真理との調和を心がけなければならない。
- (5) 神ご自身のご性質から考えても、私たちの愛の実践が義や真理から外れてしまっているとき、それは実は愛ではない。